

ドレッサージュホースに育てよう!



◆ ハースパス (Part III)

☞ 頭頸を捻ってしまうハーフパスの修正方法 ☞

馬場馬として調教を進めていく中で、左右の口が均等に感じることは稀です。どの馬にも多少の違いがあり、それが極端に違う場合もあって困ることがあります。オースミイレブンも例外ではなく「右口が硬く左口が柔らかい」という症状があります。それは内方姿勢などの屈曲を求めた場合に顕著に感じます。ハーフパスの場合などは特にその差が明らかになってしまいます。

オースミイレブンで、ハースパスの屈曲をとった場合、頭を捻ることがよくあります。例えば、右ハーフパスをしようと内方姿勢をとると、馬の左耳が低くなり、右耳が高くなって頭頸を捻ってしまうことがあります。

これは、右口の譲りが硬いからといって内方の右口を引っ張って内側に向けようとするために生じる事例です。硬い方の口は、通常の扶助を使っても反応が薄いため、強く使うことになります。

この問題を完全に解決することは容易ではありません。しかし、可能な限り馬に協力してもらおう考え方と方法があります。以下の通りの手順で行う修正法をまとめてみました。

・ 右ハーフパスの場合

<修正ファーストステップ>

まずは、「頭を捻る<屈曲をとらない>」という基本の考えを持ちます。

修正の過程では、レグイールディングに近い体勢でほとんど屈曲させないでハーフパスをします。

捻れたものを直すときには、単純に真っ直ぐにします。同じように馬が頭を捻るということをなくすためには最初は真っ直ぐにします。



▲頭頸を捻って
右耳が高くなった状態



▲左右の耳の高さが同じ状態

<修正セカンドステップ>

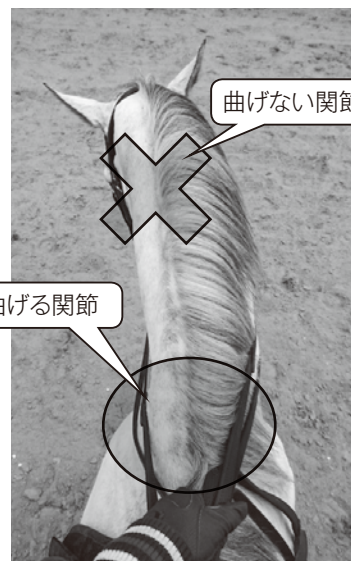
その後の屈曲は当然、正しい体勢よりも浅くなり、そこから以下の通り徐々に修正していきます。

- ① 常歩をしながらコンタクトをとる
- ② 直線上で内方姿勢をとる
- ③ 頸の付け根のき甲部分の関節から屈曲を求める
→ 外方手綱で馬の肩を押すように使い、内方手綱を開いて屈曲したら緩める、を繰り返す
- ④ 顔の付け根の頸から屈曲させないようにする

この一連の屈曲の方法でハーフパスの体勢を作ります。これらの過程で再度、頭頸を捻るような仕草をしてあげれば、それは馬にとっては苦しいサインです。ハーフパスでのコンタクトが強くなり過ぎていないかチェックをしながら行い、直ちに修正ファーストステップに戻るようにします。

◆ コンタクトって？

ハーフパスでのコンタクトはもちろんのこと、通常のコンタクトについて、再度ここで考えてみたいと思います。なぜなら、それはどんな場面でも重要で、しかしながら感覚的なことは言葉で表現するのは難しいからです。



私見ではありますが、馬とのコンタクトは、「最小であればあるほど良い」と考えています。そう言う、「コンタクトは軽いタッチが美德」と考えがちです。しかし、その過程の中では、様々なことがあります。時には強くコンタクトを持ち、馬に“進むべき道しるべ”を示すこともあります。正直なところ、私は馬に対してびっくりするくらい強いタッチで拳を使うことがあります。しかし、それは一瞬です。強い扶助は瞬間的に使うべきです。そして馬がそれを理解したら直ちに愛撫して「さっきみたいなことはお互いにもうやめようね……」と仲直りして、次に繋げます。「馬術は力ではない」という言葉も真実です。しかしその過程には、馬との葛藤があります。その先に共同作業の喜びが待っています。

コンタクトが軽く、指2本でも保てる状態になるということは、馬自身が体勢とバランスを維持していて、後躯との繋がりがあるということです。コンタクトは馬の口との関係だけにと取られがちですが、そうではありません。その境地に到達するまでには、推進する→拳を使う→譲ってみる→馬がどう反応するか試す→馬が協力してくれるようなら譲ったままにする……という一連の作業を常に行います。

一番の悲劇は、騎手が常に強い拳の作用を使い続けることです。馬は何を求められ、どうすれば楽になるのか、全くわからずパニックになります。繊細な馬は立ち上がったりにして逃れようとします。騎手の拳の加減が馬の気持ちまでも左右します。それだけの責任が我々にはあります。「たかが馬じゃないか」と思う人は馬に乗る資格はありません。

我々は、ハーフパスにしる、ピアッフエやパッサージュのような力強い運動でさえも、馬に協力してもらい常に軽いコンタクトで運動できることを理想として、明日も馬に跨ります。

